

国語科における定番教材の適正化に向けた実践的検討と開発

大澤千恵子（東京学芸大学）

○清水良（附属世田谷小学校）

秦美穂（東京都西東京市田無小学校）

岡山真子（都立世田谷総合高校）

齊藤千尋（茨城県守谷市黒内小学校）

小木曾すびか（東京都町田市立忠生小学校）

数井千春（附属小金井中学校）

代表者連絡先：cosawa@u-gakugei.ac.jp

【キーワード】国語科 / ファンタジー / 定番教材

1 はじめに

（１）背景及び目的

国語科教育には、特に文学的文章において定番教材と呼ばれて長らく定着している教材がある。高等学校では、夏目漱石「こころ」や森鴎外「舞姫」、中島敦「山月記」が、中学校では、太宰治「走れメロス」やヘルマン・ヘッセ「少年の日の思い出」などが挙げられる。小学校では宮沢賢治、あまのきみこの他、新美南吉やレオ＝レオニの物語が複数含まれている。だが、同じ定番教材であっても、初等と中等教育では、その文学領域に大きな違いがある。初等教育においては、「ファンタジー」と呼ばれる、空想的な物語教材が非常に多く、一方中等教育以降になると、写実的な小説が中心となっているのである。このことは、戦後、とくに 20 世紀後半にかけての日本の国語科教育における児童理解の様相を表している。子どもは、初等教育期においては空想的物語に親しむことは発達段階上適しているが、中等教育期にあつては、写実的で難解な文学作品を読むことが成長として受け止められ、推奨されたのである。そのことは、文学史上の傾向とも合致しており、近代文学にあつては、作品は写実主義が主流で、読解や解釈も写実的な文学にふさわしいやり方が流通していたのである。その影響は初等教育にも及んでおり、空想的な物語文であるにもかかわらず、読解の方法は大人の目線で、写実的な物語の解釈があてはめられてきたのである。そのため、ファンタジー作品が教材化されている場合、子どもたちは楽しく読む一方で、教師は教えるににくいと感じることが少なくなかった。

21 世紀になってからは、児童文学や想像力についての研究も進み、大人も「ファンタジー」に親しむようなパラダイムシフトが見られ、国語科教育の中でも想像を広げる読みが重視されるようになってきている。とはいえ、それらはまだ大人の目線による解釈や読解から抜け出せておらず、子どもの自然な読みに対しては、十分に目が向けられているとは言えない現状にある。

また、中学や高校では、ファンタジーの要素を持つ教材自体が少ないだけでなく、「山月記」や「永訣の朝」などの定番教材の空想性に目が向けられた読みがなされてこなかった。さらに、空想性の高い文学の教材開発などを行い、発達段階にふさわしい新たな定番教材となるものを作り上げることも必要である。したがって、定番の教科書教材を適正化するためには、空想性ということの理解と社会的受容を踏まえた上で、教育における再検討が急務なのである。本研究では、初等教育の発達段階に照らし合わせて、子どもたちの読みのありようを観察し、その上で系統的にどのような空想的物語文の教材が適正であるのかを検討するとともに、中等教育における空想性を活かした定番教材の読みの実践を行い、教科書教材の適正化および空想性に着目した新たな指導法の確立、さらには教材開発を目的としている。

2 本プロジェクトの概要

（１）2022 年度の予備実践

初年度は、定番教材とされているファンタジー作品が発達段階上適切か否かの確認のための予備実践を 2 つ行った。まず、一つ目は、小学校 6 年の定番教材である宮沢賢治の「やまなし」（光村図書）の絵本の読み聞かせを就学前、低・中・高学年に分けて実践を行った。授業で「読むこと」の学

習として行われる際には、語句の難解さやイメージの飛躍に戸惑う児童もいる。それは、分析的な理解や常識的な解釈が難しい散文詩のような物語だからである。ところが、絵本の読み聞かせを行った際には、就学前の子どもであっても、そうした戸惑いは見られなかった。つまり、物語そのものに対する子どもの自然な読みには、国語科で学習の際に生じる軋轢は見られないということになる。

その際、着目したのは、「クラムボン」という架空の存在である。「クラムボン」の受容には、発達段階ごとの違いが見られた。一般的には小さな子どもの方が、現実離れしたものに親しみやすいと考えられているが、実際には一番現実離れしたものへの理解の困難さを示したのは、小学校 4 年生であった。高学年になると、むしろ現実と空想の間の存在への受け止めが可能となるのである。例えば、古来の伝承的存在である妖精のように、現実と空想の中間的存在を受容できるようになり、クラムボンを妖精のような何かとして捉えて受容できる傾向が見られた。これを踏まえ、町田市立忠生小学校四年生を対象に、ファンタジー教材の予備的授業実践を行った。

(表 1) 授業実践の詳細

対象	町田市立忠生小学校 4 年 1 組 2 8 名 4 年 2 組 3 1 名
日程	2022 年 10 月 5 日～10 月 14 日
時間	全 5 時間 × 2 クラス
内容	【知識及び技能】言葉から想像を広げたり、独特の表現のよさを味わったりすることで、場面の様子を表す語句の量を増し、語彙を豊かにすることができる。((1)オ) 【思考力、判断力、表現力等】・情景を具体的に想像し、「雪わたり」の世界を豊かに感じ取ることがができる。(C(1)エ) 【学びに向かう力、人間性等】・叙述を基に情景を具体的に想像し、学習課題に沿って思いや考えを進んで伝え合おうとしている。

本単元では、学習者としての児童の自由な発想を受け止めて生かすことを手立ての工夫とし、授業を展開し、自分と友達のイメージの重なりで想像が広がるように、児童の考えを教師が受け止めてつなぐことを目指した。また、五感に働きかける指導の工夫として、色やにおい、音や触覚に関わる表現を取り上げ、必要に応じて実物や映像を紹介することで想像をよりふくらませ、作品世界を体で感じ取ることがを重要視した。そして、ファンタジーの世界に自分の現実を拡張するような体験活動も取り入れ、学習活動のゴールとして「〇〇小学校幻灯会」を計画した。自分たちの「歌」や「幻灯」を創作することで、想像力と創造力を働かせることができる。想像の世界と自分の現実が近づいたり重なったりする楽しさは、ファンタジーならではの魅力であり、この時期の子どもたちだからこそ自分事として味わえるものでもある。想像の世界を「ありえない」と否定するのではなく「もしかしたら・・・」と自分の現実を引き寄せるような心の動きを丁寧に観察した。単元を通して、四年生の空想性は固定されたものではなく、常にリアリティと均衡を取りながら、一人の子どもの中で揺れ動いていることが分かった。

(2) 2023 年度の本実践

昨年度の 4 年生段階における想像力の転換点を踏まえ、H・C・アンデルセンの『小さい人魚姫』(1837)を同一教材として、子どもたちにおける文学的虚構の受容を想像力と関連付けながら、発達段階別に課題設定や発問の工夫を行うことで読み深める授業実践を行った。具体的には、公立小学校 2 年生と、附属小学校 4 年生と 5 年生、附属中学校 2 年生、公立高校 1 年生を対象とした 5 つの実践を比較検討する。

公立小学校低学年での実践

茨城県守谷市黒内小学校では、読書活動を促すためのやなせたかしによる書下ろし「本は友だち どうわの王さま」(東京書籍・2 年)の中でアンデルセンの人魚姫は紹介されている。以下に概要を示す。

(表 2) 授業実践の概要

目標	童話を聞いて感じたことや思い浮かべたことを、絵や言葉にして共有する。
----	------------------------------------

	〔思　　カ〕 童話で遊びながら、いろいろな本があることを知る〔知　　エ〕
対象	茨城県守谷市黒内小学校　２年７組　　３１名
日時	令和５年７月１９日１１：３５～１２：１５
内容	童話作品に触れて、物語世界をイメージする。

図１　空気の娘の世界



本授業では、アンデルセン童話の絵本を用いた授業を通して、子どもたちの心に浮かぶ別世界のイメージを表した。中でも、人魚姫が最後に転生する空気の娘の世界は、物語における不死の魂とも結びついており、無償の愛の概念など、理性で理解することが難しい場面である。２年生ながら、そうしたいのちや愛に関わる問題を受け止めている様子は、物語世界のイメージを表象した抽象的な図画（児童の指示で教師が描いたもの）から見て取ることができた。

）附属世田谷小学校４年生・５年生及び附属世田谷中学校での実践

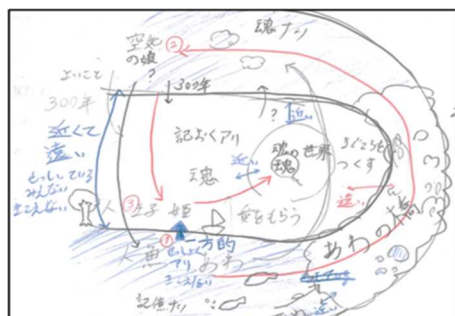
附属小学校では、２つの異なる学年に同一の教材を用いて読解の授業を行った。その時に共通しているのは、非現実的な虚構の世界を子どもたちがどのように受け止めているのかを探るための発問である。アンデルセン童話「人魚姫」は、人魚の住む海の底の世界から始まり、魚の尾を人間の足に変えて人間世界へ移動し、海の泡となったかと思いきや空気の娘の世界へと転生するが、その後さらに不死の魂の世界に向かうことが示唆されている多層構造の物語である。こうした現実離れた虚構をどのように受け止めて物語を読み進めているのか、学習者としての子どもの読みに着目した。特に４年生では、物語の虚構性をそのまま受け止めている様子が見られ、高学年から中学校段階での文学の虚構性に対する受け止め方とは異なる姿勢が浮かび上がった。附属中学校では、４年生段階の虚構を虚構として読むという本来の自然な読みに立ち返り、多層構造を確認し、その上で自己の読みを相対化していく学習を行った。小中連携の学習でもあるため、両実践を併記して記す。

（表３）授業実践の概要

【実践１】	
時 期	２０２３年 ９ 月～１０ 月
学習者	附属世田谷小学校　４年生３クラス５年生３クラス
授業者	清水良
教材	立原えりか訳(2004)『名作を１冊で楽しむアンデルセン絵本館』講談社
単元名	「『小さい人魚姫』について語り合おう」
目 標	・登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて想像する。(C(1)エ)・文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、一人一人の感じ方などに違いあることに気付く。(C(1)カ)
【実践２】	
時 期	２０２３年 ７ 月・９ 月
学習者	附属世田谷中学校　２年生４クラス
授業者	渡邉裕
教材	大畑末吉訳(1984)『完訳アンデルセン童話集１』岩波書店
単元名	「『世界』の広がりを読む」
目 標	・物語世界に没入して「読む」ことを通して、虚構と「現実」について考えを深める(C(1)イ)・文章を読み感じたことや考えたことを共有し、事柄同士の関連性やつながりをもとに自身の読みを捉える。(C(1)エ)

四年生段階でも、複雑な物語の多重構造を理解しているが、主人公の人魚姫への同情が非常に強く感じられ、悲恋に対して人魚姫本人以上に悔しく思う姿が見られたが、５年生段階になると、図２に見られるように、物語全体を俯瞰してみることができ、人魚姫以外の登場人物にも冷静な判断を下すようになる。そのことと、物語世界の複雑さの受け止め方は相関関係にある。

図2 5年生による物語構造の図

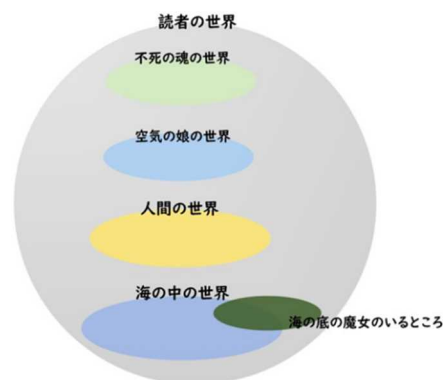


中学校段階になると、さらにこうした複雑な物語構造を読む自己の視点とその移動にも気づくようになる。つまり、図3に示すような、虚構の物語を読む自己の現実と虚構の関係性にも目が向くようなメタ認知的読解が可能となっているのである。のことから浮かび上がったこととして、学習者は、空想性を理解する「子ども独自の心理」によってつくられたファンタジーの当事者であるということであった。そのことは、ファンタジーの特質でもあり、物語の多重構造に寄り添って読む中で哲学的思考を働かせて愛や魂について考えたり、自己の

現実には物語を透過させながら、虚構と現実の双方に生じるリアリティを再認識したりできていた。

2つの実践を通して明らかになったことは、ファンタジーは、

図3 読者と物語の関係性



語りに導かれる学習者の視点に沿って読むべきものであり、学習者は自分が想像したことを語ることによって、現実世界にまで及ぶ多重化した世界を再現し顕在化させることができたことである。子どもの自然な読みを教室で紡ぎ上げていく時、学習者それぞれの想像が共鳴し、より大きな虚構を通したリアリティが獲得される様子が見て取れたのである。中学校2年生段階になると、構造や表現を分析することや「なぜ」という問いを立てていくことに意識が向いているからこそ、小学生段階に見られたような「物語世界をそのまま受容すること」を意識的に行うことで、かえって虚構のリアリティを感得することができたといえる。物語の複雑な多重構造を捉えるとともに、物語の位相を移動している自己の読みの視点を自覚化し、虚構と自己の読みの関係性についての再構築を行う相対化が可能となり、自己の現実における虚構と現実の単純な二項対立からの解放にもつながった。

3 成果

成果には、メンバーの重複により、特別開発プロジェクトと共通しているものも含まれる。

【紀要／論文】

1. 清水良、渡邊裕、大澤千恵子（2023）学習者の視点を踏まえたファンタジー教材の系統的学習指導、東京学芸大学国語教育学会研究紀要 19 巻、37-48、2024 年 3 月。
2. 大澤千恵子（2023）不思議探究としての「ファンタジー」のリアリティ、現代宗教 2024、71-94、2024 年 1 月。

【書籍】

1. 扇田浩水、山田夏樹、大澤千恵子、千田洋幸編、文学理論と文学の授業を架橋する—虚構・語り・歴史と社会(担当:共編者(共編著者)、範囲:編集委員/執筆者)、学芸大学出版会、2024 年 3 月 31 日。(ISBN: 4901665650)。

【学会発表等】

1. 大澤千恵子（2023）ファンタジーの特質に関する児童文学的知見—ファンタジー・メルヘン・リアリズム—、全国大学国語教育学会信州大会、2023 年 11 月 5 日。
2. 清水良、渡邊裕（2023）ファンタジーを読むことで広がる読み手の想像力とそのリアリティ—小中連携による系統的な想像力の育成の実践的提案—、日本国語教育学会研究部主催令和 5 年度第 2 回公開研究会、2024.3.23

【講演会・研究会・学校訪問等】

1. バンコク日本人学校訪問（2023）海外日本人学校における国語教育および幼小連携、読み聞かせについての研究。2023 年 7 月 25 日～29 日
2. 小澤俊夫昔話講演会（2022）昔話における語りの知見を国語教育の現場に活かすワークショップ、2022 年 10 月 10 日、於：東京学芸大学。
3. 演劇的ワークショップ（2022）世田谷パブリックシアター、アーノルド・ローベル「お手紙」。

4 おわりに

本プロジェクトは、教科書の定番教材を見直し、学習指導要領の学習過程を再検討するとともに、

初等・中等教育における教材開発と、想像力の育成のありようについて検討を重ねる実践を行った。固定化された空想の世界にもある種のリアリティが生じることや、現実の中にも虚構性が紛れ込むことがあることに目が向くようになったのである。

すべての実践の成果として、ファンタジーを教材として読む際には、虚構性の受容のありようには発達段階による相違はあるものの、二項対立や現実批判とは異なる「子どもの論理」があり、学習者は多重化された入れ子構造の中で物語内部に取り込まれて、物語の行く末をイメージしたり、自己の現実の認識を変容させたりしていたことが挙げられる。中学生段階では、それを踏まえて自己の読みを相対化させる分析を行ったが、小・中のいずれの学習者にも虚構に生じるリアリティの感得を見ることができた。紙幅の都合上、詳細については割愛するが、都立世田谷高等学校でも一年生の「言語文化」の授業で、伝承物語を基盤とした「文学的おとぎ話」という物語領域について学びを行うことができ、空想的文学作品の少ない高等学校での学びの可能性も開かれたといえる。